

交換留学報告書

* この報告書に記載される内容は多文化社会学部のウェブサイトに記載いたしますので、予めご了承ください。

氏名	佐々木 奈緒	学年(渡航時)	3年
派遣先大学	ノーザン州立大学		
国・地域	アメリカ・アバディーン		
派遣期間	2024 年 8 月 ~	2024 年 12 月	

履修科目

1 学期目	
履修科目	授業内容
Introduction to Social Work (SOC270)	多様な社会サービス、その歴史や方法、関連する刑事司法制度について
Criminology (SOC351)	犯罪に関する理論、少年非行、司法、犯罪行動システム、犯罪被害者、公正について
Social work practice (SOC315)	すべてのソーシャルワーク活動の概要と必要なスキル
Socio-cultural theory (SOC281)	社会学理論の内容、社会問題への適用

留学レポート(1,500 字以上)

出発する前は不安ばかりだったが、帰ってきてから振り返ると毎日本当に充実していてたくさんのことを吸収できた四カ月間だったと感じる。

私は 4 つの社会学系の講義を履修した。どの講義も履修者が 15 人にも満たない小さなクラスで、学生と教師の距離感が近かった。SOC270 と SOC315 は同じ先生によるソーシャルワークに関する授業で、課題の一つとしてその地域のソーシャルワーカーにインタビューを行ったり実際に施設を訪れ話を聞いたことが印象に残り、貴重な経験となったと思う。SOC351 は刑事司法学の分野もカバーするような全般的な犯罪学について学んだ。毎回の講義で実際の事件についてグループでディスカッション、発表を行うのが大変だったが勉強になったと思う。アメリカ社会において銃や薬物がどれくらい普通のもので、それによりどのような事件が起こっているかを具体的に知り、考えることができた。どのような人が被害者となりやすいかという議論やどのように犯罪を犯した人を公正させるべきかといった議論は今までに全くふれたことのない分野であったため興味深かった。SOC281 は最も大変な授業だったと思う。講義で取り扱った社会理論を身の回りの社会問題に適用しその有効性について議論するというのがだいたいの課題の基本的な内容であったため、よく考えなければ完成させることのできないものばかりだった。一つ一つの課題が大変な上にそれが課される頻度も多く、ただのレポートではなくプレゼンやポッドキャスト、動画など様々な形式での提出を求められたのも消化に苦労した理由の一つである。しかし、この講義によって社会学理論やたくさんの理論学者についての知識が増え、社会問題について客観的に考えることができるように思う。また、単位はもらえないがマーチングバンドという授業もとっていた。これはマーチングバンドの一員として留学生がシンバルを演奏するというものだった。火曜日から金曜日に練習し、フットボールゲームでの応援や近隣の街での演奏にも参加した。留学生の面倒を見てくれた教授が最初の数回以降はなぜか来なくなってしまうため、指示が出されず留学生だけ置いてけぼりにされることも多々あったが、ここでしかできないような経験も多くあったと思う。

学校施設も新しく清潔に保たれているものが多く、充実していたと思う。寮は同じく長崎大学からの日本人と 3 人でのルームシェアで、シャワー室やトイレ、調理スペースは共用だった。私の寮は比較的静かで、廊下が臭いことがある以外は問題も少なかったように思う。たいていは二人部屋なので三人部屋は珍しく、広いので友達を呼んで大勢で遊ぶこともよくあった。リビングルームやスタディールームもあって、Wii やいろんなボードゲームも置いてあったため友人と集まって遊んだり勉強したりもした。一階に大きなキッチンがありみんなで集まって料

理をして食事できたのもよかった。コンビニのような小さな店も併設されていて、小腹がすいたときに丁度良かった。図書館は日本と比べて利用者が少なく、だいたい好きな席を確保できたので重宝していた。学生は無料で利用できるジムがあったのもよかった。アスリートの多い大学だったため色々な機械や器具も揃っていて、よく利用していた。予約したら使える体育館もあり、サッカーやバスケットボール、ピククルボールなどのスポーツを楽しんだ。10ドル程度で利用できるバイキング方式の食堂は、ピザやハンバーガーがレギュラーメニューだったため徐々に飽きてしまった友人もいたが、簡易的な調理スペースやワッフルメーカーもあったため個人的には好きだった。食堂以外にベーグルショップもあり、授業前に軽食を取りたいときによく利用していた。

この大学があったアバディーンという町は本当に田舎で、スーパーも大学から徒歩 20 分、ウォルマートなどのより大型スーパーや服屋に行くには車が必要、というような場所だった。自炊したいときや身の回りのもので必要なものがあるときは車をもっている友人に頼んで連れてってもらわなければならない必要があった。大学のオリエンテーションリーダーという人たちが定期的に企画する、アバディーンの娯楽施設を楽しむためのイベントに参加することで、ゴーカートやローラースケート、ボウリングを友人と楽しめた。美味しいメキシコ料理やタイ料理を食べられるレストランもあって、たまにそういったところで外食できたのも思い出である。ダウントウンや古着屋、カフェもあり、大都市のようなショッピングモール、観光施設などはないが、友人と遊ぶ場所は多くあったと思う。

Friendship Family 制度により、週末に現地のホストファミリーと出かけたり食事をしたりもできた。私のホストファミリーは自分の教会を持っていたため、毎週日曜日に教会での活動に参加させてもらったり、自宅に招いてもらって夕食を振舞ってもらったりした。車で一時間ほどの自然公園に連れて行ってもらったこともある。彼らと関わる中でアメリカの家族の文化やキリスト教文化を学ぶことができた。私の誕生日にはわざわざ寮まで手作りのケーキを持ってお祝いしに来てくれるような、温かいホストマザーとホストファザーだった。一度他のホストファミリーに混ざってラシュモア山に連れて行ってもらったことも大きな経験だった。

Thanks giving break には友人とシカゴに旅行し、美術館や展望台、水族館などを観光した。アメリカの田舎だけでなく都市部も訪れて、アメリカの色々な部分に触れられたことは視野が広がる経験だったと思う。

ネイティブの話す英語のスピードに苦労したり、自分の言いたいことが上手く伝わらなかったり、文化の違いから人間関係で悩み日本に帰りたくて仕方ない日もあったが、今は本当にアバディーンやアメリカで出会った人々、土地、その全てがとても恋しく感じる。海外で働くことも視野に入れるようになったし、学生のうちにもっと色々な国を訪れたいという気持ちが強まった。また、英語学習のモチベーションが大きく上がった。この 4 カ月間での色々な人との出会い、学んだもの、感じたことは私に大きな影響を与え、一生忘れられないようなものをたくさん得たと思う。この留学を支えてくださった先生方、職員の方、家族や友人などすべての人に深く感謝したい。

留学中の写真(5枚程度) ※写真のキャプションも入れること



留学生と Friendship Family 制度に参加しているホストファミリーたち



ボウリング場で友人達と



フットボールゲームとマーチングバンドの様子



ラッシュモア山



“Mini Grand Canyon”とも言われる Badlands



シカゴ劇場